# 思い付いたネタ放置所

竜人機

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分、竜人機のふと思い付いて頭から離れず、気付けば設定を考え、話を書き出してしまっていた二次創作などのネタの放置所です。

リハビリがてらなので続き物でも基本的に途中で息が続かずにエタるの前提。設定考証も穴だらけです。なので批判はあっても勘弁してくださいｍ（＿＿；ｍ

# 目　次

シンフォギア二次：転生オリ主・オリライダー龍騎編　そのいち　1
シンフォギア二次：転生オリ主・オリライダー龍騎編　そのに　8
シンフォギア二次：転生オリ主・オリライダー龍騎編　そのさん　17
シンフォギア二次：転生オリ主・オリライダー龍騎編　そのよん　27

# シンフォギア二次：転生オリ主・オリライダー龍騎編

そのいち

『　戦騎龍唱シンフォギアＯ　』

## 序章Ｉ

## プロローグ

突然だが、俺はいわゆる転生者だ。

……うむ、昨今（まった）よくあるヤツ（なんだ）。済まない。

仏の顔もって言うしね、謝って許してもらおうとは思っていないよ。

あぁ、遅くなったけどこのオレンジジュースはサービスだから、一口でも飲んで落ち着いて欲しい。

なぞと現実逃避にバーボンハウスなことを脳内で呟きつつ、日曜日は３時のおやつと一緒に出されたオレンジジュースをくぴり。

いやね、俺ってば少々人嫌いなことを除けばどこにでも居そうなくたびれた中年独身オタリーマン、だったはずなんだよ。

それがふと気が付いたら周囲３６０度なんにもない、ただただ真っ平な地面？　と薄暗い空？　だけが延々と続いて地平線が見えるっていう異様な場所にいたんだ。そうして「なぁにこれぇ」と呟かんばかりに混乱する俺をよそに現れたのは、マジモンのやばいのだった。

一目でやばいと本能でわかるどころか、記憶に姿と声を残すのを無意識に拒否するくらいやばい神か悪魔かわからない超常存在、某幼女

へ転生させられたおっさんが仮称したそれとは比べもにならないだろうモノホンの『存在X』が。
俺の本能さんが精神衛生のため(SAN値)に姿と声を記憶することを拒否(チェック成功)してくれたが、聞いた言葉は大体覚えていた。要約すると『俺氏蝶ヒマ。死者の中から適当に選んだＹｏｕをいくつか特典付きで転生させて観劇するから、チャチャチャッと逝っちゃいなＹｏ！』である。
しかし俺、死んだ覚えないんだが……
ま、まぁ、死に際をはっきり覚えていてトラウマになるよりはいいけどもさ。覚えていないのはあれかね、寝てる時とか意識ない時にアレがコレして往生昇天ってとこかね。ブラックじゃなかったけど運悪く仕事がちょっとばかり立て込んでデスマって徹夜続いてたし。
ともあれ、転生して現在御年７歳のピカピカの小学一年生の俺なわけだが、転生した世界は――

「どうした、たくみ？　きゅうにぼーとしだして」

とってもバーローボイスな声に振り向けば、隣に座る特徴的な赤毛をした女の子がその隣に座る幼女と一緒に俺の顔を不思議そうに覗き込んできていた。

「なんでもない、とうとつにものおもいにふけりたくなっただけだよ、かなでちゃん」
「たぁにぃへんー」
「たくみがへんなのはいつものことだけど、だいじょうぶか？　」
「へんへんて、あたまがおかしいみたいにいわないでくれ。じじつだとしてもきずつくものはきずつくからねかなでちゃん、□□□ちゃん」
この子たちはお隣さん家の幼馴染み、天羽　奏ちゃんとその妹ちゃんだ。

――はい、『戦姫絶唱シンフォギア』です。やったね！　特異災害（ノイズ）のせいでモブには死亡フラグ満載の世界だよ！　やった、ね……（白目）

……第一期第一話でいきなり主役級の主要キャラ（今隣にいる幼馴染み）が死んだこと以外は死ぬ死ぬ詐欺連発だけど、それは主人公（ビッキー）たちだけだよ！　どチクショー!!

なに？　なんなの!?　これはアレか、幼馴染みってことで俺も神獣鏡発掘現場に同行してノイズに襲われ、オルフェノクが如く灰になって死ねと！　天羽　奏の悲劇メモリアルの一部に成れと！　どんなのか知らんけど特典いくつかとやらはどうした早くぜんぶよこせくださいおねがいします!!!!（大懇願）

「？　ほんとうにきょうのたくみはいつもよりもずっとへんだぞ」

「んな!?　な、ななんでもないほんとになんでもないそれよりこのあとどうするなにするなにをやる」

訝しげな表情で息がかかるほどに顔を近づけて覗き込んきたかなでちゃんから慌てて顔を背けてそう捲くし立て、無理やり話題やら空気やらを換える。

いくら物心つく前からほぼいつも一緒にいる幼馴染みだからって無防備が過ぎる。心臓に悪くてかなわん。

あ？　ロリコン？　バッカおまえ、バッカバァカ！　将来死亡フラグさえなきゃそのままメインヒロイン張れるほどの美少女になるくっそ可愛い美幼女やぞ。あの天羽　奏やぞ。さらにこちとら心と体を分離できてる某バーローと違って肉体年齢に思いっきり精神引っ張られて感情の抑制が上手くできんのだ。いくら精神年齢高くたって将来美少女になることが確定してる可愛い美幼女に無防備に懐かれて余裕平然と流せるか！　むしろ『ＩＱ６００（特典のひとつっぽい）』もある上に色恋やらエロやら関連の知識や経験がある分、そっち方面が早熟してて余計に反応に困るわ!!　まさか我が股間の紳士（Mysoon）が幼くて反応しないことに安堵する日が来るとは思

いもよらなかったわ!!

「ふふふ、たっくんはやっぱりおませさんなのねぇ」

「おませ～？」

「？」

あらあらうふふと微笑ましい物を見たとばかりに温かい眼差しを向けてくる今生の母上（My mother）。そしてその言葉の意味が分からないと可愛らしく首をかしげて頭上にハテナを浮かべる妹ちゃんと同じく首をかしげつつ、言葉の意味は分かるが「なんでここで言うのか？」という風な疑問を顔に浮かべるかなでちゃん。

Ｈｅｙ！　Ｍｙ　ｍｏｔｈｅｒ！　いくら前世の記憶を思い出す前から歳不相応にやたら老成した精神性に可愛げのない言動行動が目立っていた幼児とはいえ、息子のいつもと違う反応を見て愉しむのはやめてくれ。地味に来る。

「……ねる！」

オレンジジュースをぐびりりっと飲み干し、そう告げて席を立ってダダダッと足早に愛用のタオルケットを取りに歩を進め、手に取るや否やリビングの３人掛けソファへダイブ。そのままタオルケットを頭からかぶるようにくるまって丸くなる。

「子供か！」と言われるかもしれないが、ならば俺は「子供だ！」と胸を張って返そう。さっきも言ったことだが、子供の身体（は）に引っ張（ま）られて感情の抑制が上手くできないのだ。妙なボロや変な失敗をするくらいなら子供らしくふてくされていた方がマシだ。

例え母さんの「あらあら」という微笑まし気な声やらが聞こえてきていてもだ。

「たくみー」

「……」
「たぁにぃー」
「……」

妹ちゃんを連れてかなでちゃんが側へ近寄ってきて「よくわかんないけど、きげんなおせー」と言いながら構ってくるが、俺は頭の中で最近ではイチゴ味になってはっちゃけてる某聖帝のかつての名言のように「動かぬ！　喋らぬ！　もう知らぬ！」と叫びつつ、一層小さくタオルケットにくるまった。

「んー……とうっ」

かなでちゃんのそんな掛け声が聞こえた後に襲ってきた衝撃と重みに思わず「でゅえっ!?」とどこぞの決闘者の掛け声のような声が漏れ、慌ててタオルケットから顔を出せば、あらお約束。特徴的な赤毛のくっそ可愛い美幼女のニッカと笑う笑顔がそこに。

「あたしもねる。なかにいれろー！」
「ちょ……まっ、かなでちゃん！」
「おねーちゃんずるい。わたしもー！」
「ちょぉッ！」

ホントにちょっと待って。いくら十にもならない歳の子供でも3人まとまって川の字で寝れるほどこのソファは大きくないんだから。というか普通これくらいの年齢になったらわからないなりに異性を意識して距離を取るものでしょうが、かなでちゃん、いやさ奏さん。スキンシップ激しすぎやしませんかねぇ!?

そんなこんなで時折りＴＶで特異災害のニュースを見聞きしながらも戦姫絶唱シンフォギアとは思えないほど、特典なんて物が必要ないほど平和な日々が過ぎていく。

このまま平和に過ごすことは無理だろうことなど分かりきっている。約束された激動（原作開始）の時は刻一刻と忍び寄ってきているのだから、必ず力は必要になるだろう。

しかし、特典で戦える力を得ても俺は自分の身を守ること以外でその力を使うつもりはない。

なぜなら、どんな特典が手に入っても死亡キャラ生存目指して原作介入Ｄａｚｅ！　なんてのはないな、というのが将来に対する俺なりの考えだからだ。

俺は『自分の分』というものをわきまえているつもりだ。転生して特別な立ち位置、特別な力や才能を得ようと根底にあるのは前世と変わらない自分なのだ。人間早々変われるものじゃない。それは転生しても同じ。

記憶と人格がそのままなら人間性もそのままだ。転生したからって人間としての器が大きくなるわけでも、悪人から善人へ変われるわけじゃない。悪人なら悪人のまま、下衆は下衆のまま、偽善者なら偽善者のまま、何も変わらない。

聖人君子やら英雄やらには決してなれやしない。俺は最高の力を得たぞと万能感に酔ってなにか高望みしたところで、失敗するだけだ。

あと第一期ラスボスが何喰わぬ顔で主人公勢の中で獅子身中の虫をやっているのだ。隙を見せたり下手こいたらマッハで詰む。最悪だと得た特典によっては奪われてデッドエンドまっしぐらである。

そして何より、俺は体張って命を懸けるなんて、自分から死亡フラグ建てに危険に飛び込むのはごめんこうむる。痛いのも苦しいのも怖いのも真っ平だ。

加えて『希望へ向かう終わらない夜へと繋がる絶望へ進む零の物語』を知る身としては必要な絶望悲劇に死っていうものを、納得はできないなりに理解はしているから。様々な創作物、二次創作物から本来たどるべき道筋を歪めたら助かる命も助からず、より多くの命が失われ、より大きな悲劇や絶望が顕現するかもしれないと知っているか

ら。
だから、天羽(この)奏という少女(幼馴染み)の身に待つ悲劇と死の運命は、仕方がないものなのだ。

……どうあがいたって、どんな力があろうと、俺ごときにはどうすることもできはしない。

そんな風に思っていた時期が、俺にはありました。

「クッソッッッたれがぁあああーーーッ！！！」

数年後、俺こと一文字　巧がノイズ(特異災害)の群れの中心で嘆き叫ぶまでは。

つづく？

# シンフォギア二次：転生オリ主・オリライダー龍騎編
## そのに

『　戦騎龍唱シンフォギアＯ　』

### 序章Ⅱ
### 別離と転機

「……」

幾ばくかの時が過ぎ、俺こと一文字　巧が小学２年生は８歳となって間もなく、ぽつりぽつりと小雨が降り出した生憎の天気と黒い喪服に身を包んだ人々の中、特異災害被災者の合同葬儀の場に、俺は居た。

それは、今から２０日ほど前の休日に家族３人で遠出した際に特異災害に被災したから。

別段聖遺物がどうのとかで終わりの女（第一期黒幕）が呼び出したとかではなく、ただの日常の一コマから一転しての自然発生によるノイズの出現。文字通りの特異災害によって――

「……」

――今生の両親、父さんと母さんが死んだ。

何もかもが突然すぎて、よくは覚えていない。

ただ覚えているのは「さあ、日常はもう終わり（祭）、非日常の始まりだ（り）！」とでも言うかのようにけたたましい警報が街中に鳴り響き、気付

いた時には父さんに抱え上げられて母さんや周りを行きかっていた人々が何かから逃げ惑い走り出していたことと、運よく逃げ延びた先のシェルターは既に満員でギリギリ子供一人入れるかという状況だったことと、俺に何事かを笑顔で告げて父さんと母さんの2人で俺を抱きしめてから下ろし、シェルターへと押し込み笑顔のまま扉を閉じる2人の姿。

そして、父さんと母さんが、いくら待ち続けても帰ってくることがなかったことだけ。

後々で知ったことだが、この当時は特異災害の発生、ノイズ出現の感知には地域差が激しかったようで、俺たち家族の出かけ先は二重で運悪く、ノイズ出現の数秒前に警報が鳴る程度の感知性能しかなかったらしい。

「……」

そんなことを思い浮かべて、ぼんやりと突っ立て時が過ぎていく。ただただ寒かった。身体の底から冷えていくように寒くて寒くてどうしようもなかったけれど、俺の手に指を絡ませて強く握って父さんと母さんの死を悼み泣いてくれているかなでちゃんの手が熱いほど温かくて、ありがたかった。

これが平時の俺だったら内心で「かなでちゃん奏さんそれ恋人繋ぎ！　や、め、て！　君のファンに刺される、というかＳＡＫＩＭＯＲＩな片翼の娘に切り伏せられちゃうからぁ！」とか冗談交じりに慌てふためいていたのだろうが、この時の俺にはこれっぽっちも心の余裕というやつがなかった。

それはかなでちゃんとの別れの時も、その後までもしばらく続くくらいに本当に欠片もなく、唯一の肉親となった田舎暮らしの祖（じっちゃん）父に引き取られて田舎町の小学校に転校し、祖（じっちゃん）父の住む先祖代々の武家屋敷で与えられた一室をやっと自分の部屋と認識できるようになったころまで続いた。

思えば前世の良くも悪くも放任主義だった両親と違って、今生の両親は愛情深く、子供らしくない子供の、ともすれば気味の悪い子供だったろう俺に親バカが過ぎるというほど無類の愛情を注いでくれていた。俺の中で知らず知らずにその存在が大きく、代えの利かない物になっていたのだろう。

まあ、それでも、涙一滴流しはしかったのだが。

俺には前世から人嫌い気があった。今生では新しい両親の愛情深さとかなでちゃん（幼馴染み）の押しの強さで自分でも忘れていたが、前世では仕事に支障の出ない範囲で周りに無関心だったし、出来るだけ他人を遠ざけてもいた。酷い時は家族を含めて他人との関りを忌避してさえしていたように思う。

だから、きっと、俺という人間は薄情なのだろう。

大体、前世の記憶を持とうが何の力もない、ただ他人よりも賢（さか）しいだけの子供がノイズ相手になにができたというのか。

突然のことでなかなか理解が追い付いていなかったが、父さんと母さんが死んだのは、仕方がないことだ。原作の天羽　奏のように聖遺物目当てに人為的（終わりの女）に引き起こされた特異災害（モノ）でないだけまだマシだ。

そう、まだ、マシだ。

そしうてまた時は過ぎ（キングクリムゾン）――

「え〝。もしかして、これが特典……」

――現在、あれから1年ほどが過ぎた大型連休（ゴールデンウィーク）中。９歳児な俺は武家屋敷に隣接するでっかい蔵の中でじっちゃんも知らないらしい巧妙に隠された地下へ続く階段を見つけ出し、その先にあった隠し部屋へとたどり着いていた。偶然に助けられて入ることができたのだろうその部屋を埋め尽くすどこか錬金術めいた、というか多分錬金術であろう異端技術のオーパーツ群とその中で安置された、どこか見覚えのある〝ソレ〟を前にそう呟いていた。

「龍騎のカードデッキ、のようで違うカードデッキってなにさ（遠い目）」

見覚えのある〝ソレ〟、ドラゴンの顔を模した金色のエンブレムがある漆黒のカードデッキケース。

ただし、ドラゴンはドラゴンでもお馴染みの東洋龍の顔のエンブレムではなく、額にも角が生えているらしい西洋竜の顔のエンブレムだが。そんなカードデッキが大小無数のパイプが繋がった円筒形のそこそこ大きい細身のカプセルの中、淡い翠の光に満たされたその中でフワンホワンゆらゆらと浮いていた。

「まさか、だよな。

そんなまさかなことが……」

盛大に頬を引き攣らせつつ、現状隠し部屋唯一の光源となっているカプセルから漏れ出る淡い翠の光を頼りにしてこのカードデッキについて記されているだろうはずの資料や書類らしき紙やら羊皮紙やらの束や本を手の届く範囲内ながら片っ端から手に取って読み漁る。

「は、はは、ははは……

……嘘だと言ってよバぁあニィいいッ!!」

そして、膝と手を床に突いたｏｒｚポーズで思わずそんなネタに走った現実逃避の叫びを上げた俺は悪くない、はずだ。

手にしていた古びた羊皮紙の紙切れ？　にはこう記されていた。

――　完全聖遺物〝無銘〟　――

と。……いやいやいや、完全聖遺物ってどういうこと。聖遺物ってことは物々しい安置のされ方してるからまさかと思いつつも予想してたけど。完全聖遺物ってなに？　資料には一度として表舞台で使われたことがないゆえに一切の逸話等を持たない名も無い低位の聖遺物だとか、名高い由緒正しい聖遺物と比べたら欠片にすら劣りうるとか書いてあるけれどもさ。

龍騎のカードデッキが完全聖遺物ってのはないだろ、いくらなんでも！

いやまあ、完全聖遺物の定義が何百何千年もの時を経ても『風化せずに完全な状態で現存している聖遺物』だから間違いではないちゃぁ間違いないけれどもさ。俺を転生させた『存在Ｘ』はなに？　俺に特撮ヒーローやらせたいの？　百合百合でハイパーヒロインタイムなシンフォギアの世界で、男独りのスーパーヒーロータイムを俺にやれと？

……

……

……

……

無茶振り過ぎるわどチクショー!!!

「……47、53、59、61、67、71、73、79、83……

カードデッキはひとまず置いといて、調べものと行こうか」

1と自分の数でしか割ることができない孤独な数字、素数を数えて心を落ち着けることしばし、俺は大きく息を吐いて気持ちを切り替えて立ち上がるとカードデッキ（資料に書かれたことが本当なら低位の完全聖遺物らしいけども）を無視して隠し部屋を調べることにした。

ぱっと見で広さは軽く30畳くらいはあるだろうか？　光源はカプセルからの光だけな上、壁は資料を納めた本棚や何某かの装置やらがびっしりと埋めているのに始まり作業台や異端技術によるものだろう大小様々な機器やらがあり、古めかしい筆記用具と書類や手帳などの置かれた執務机にと、色々と物が置かれているから正確なところはわからないが、雑然としているようで整理が行き届いているし、天井の高さが10m近くはあるしで、地下室だろうこの隠し部屋が閉塞感を感じないくらいには広いのは確かだった。

兎も角は光源をどうにかしなければ本格的に調べるのは難しい。どこかに明かりになる物があるはずだ。さすがに電気照明や電灯はないにしてもランプなり何かあるはずだ。

まあ、懐中電灯を取りに戻るというのが一番手っ取り早く正しい選択ではあるんだが、この隠し部屋の隠し部屋たる仕掛けがどうにも曲者なようで、所感を簡単に言えば『ランダム性の強い無地のスライディングブロックパズル』とでも言える代物のような感じか。少なくとも扉に備わっていた無地の12個のボタン群や俺が部屋に

入ったらすぐに扉が勝手に閉まってガチャンゴトンピポピパという小さな音が聞こえたから出入りごとに鍵が掛かり組変わるのだと思う。

扉が勝手に閉まったことと物音から気になって部屋に入ってすぐに出入り口の扉を調べたが、出入りごと以外にも日ごとか時間ごとにも鍵が毎回組変わっていそうな感じがあった。だからこの部屋を自由に出入りするための鍵か何かを見つけてからでないと懐中電灯を取りに戻るというわけにはいかない。今この部屋から一度でも出てしまったらもう二度とこの部屋には入れそうにないのだ。

そんなこの部屋、多分だが俺が入れたのは奇跡的偶然（ランダムマジック）による物凄い超低確率でボタン操作せずとも扉に手が触れるだけで鍵が簡単に開く日だった、ってところだろうな。そうでないと説明がつかん。何十年か何百年かに一回だけだとしても防犯的にこんなうっかりな欠陥はどうかとも思うが。

もしくは『存在X（ゴルゴム）』の仕業、だろうな。

閑話休題（ともあれ）

明かりだ明かり、あかりちゃんはどこじゃろなっと。

そんなじじくさいことをつぶやきながら俺は部屋を物色していく。久しく湧いた物事への小さな興味、些細な好奇心から蔵へと足を踏み入れた時から心を、身体中を満たしていた鬱々とした暗いモノが晴れてきていたことに気づかぬまま。

「なるほど、大体わかった」

などと呟きつつ、見つけた電灯みたいに明るく光る燃料不要の不思議ランプの明かりの下、扉の仕掛け（ギミック）ついて書かれていたこの部屋の主（ご先祖さま）だった者の残した手記を執務机にほっぽいて読みだしたこの部屋で行われていた研究、錬金術や聖遺物を始めとした異端技術について書かれた古びた羊皮紙の本（入門書か教本レベルの内容の

物）を閉じる。

「錬金術、いや異端技術か……面白いな」

特典の一つであるのだろう『ＩＱ６００』は伊達じゃない。俺の学習能力は半端ないのだ。乾いたスポンジや砂に水どころか砂漠の熱砂に水というように瞬く間にどんな知識も吸収できる。さすがに技術的な物は身体で覚える必要があるから訓練が必要だけれども。

前世の記憶を思い出してからは「勉強が楽しくてしょうがない」、なんて前世では凡人の身にはついぞ感じたことのないことを実体験して、その勢いのまま小学校に上がる頃には大学入試レベルの問題をサラッと解いて行くのが一人遊びのひとつになっていた。

多分、かなでちゃんに構い倒されて引っ張りまわされてなかったら小学校に上がる前の幼稚園児で大卒レベルの問題まで行ってたな。

だからだろう、前世を思い出す前の俺は普通の幼い子供とは違う異質に見える言動行動が目立ち、随分と父さんと母さんを心配させたようで、最終的に父さんたちは伝手を辿って有名大学病院に行き着き、そこで俺に検査を受けさせた。結果として知能指数が６００もある天才児だと判明したわけだが、あそこからだったかな。父さんと母さんの親バカっぷりがひどくなったのは。

まあそれでも二人は俺の将来を危惧するくらいには冷静だったようで、検査に携わったお医者先生始め、大学病院へ頼み込み、なんとか俺の名前が公にならない様に秘匿してもらえる運びとなった。

守秘義務があるから頼み込むまでもないと思うのだが、しかし鼻の利くマスゴミがいたようで、どこから嗅ぎつけたのか『ＩＱ６００の天才幼児』を探して検査を受けた有名大学病院を始め、あちこち嗅ぎまわっていたらしい。結局は個人情報保護法さんも仕事してくれたのか身バレせずに助かったが。

そんな俺だから入門書レベルの物から高等専門書レベルの物までの異端技術関連の様々な書物や資料が取り揃えられたこの隠し部屋（こ）は（こ）ある意味では宝の山だ。ただしカードデッキ（テメエー）は

宝に含(ダ)みたくはな(ま)いが。

とりあえずまあ、当面の暇つぶしになる一人遊びができたし良しとしよう（カードデッキから目逸らし）。

幼稚園でもそうだったが小学校の授業は程度が低すぎて話にならないのだ。これがアメリカとかなら飛び級でさっさと大学卒業まで行けたんだが、日本の教育制度上難しい話だ。仕方がない。

もう義務教育が終わったらさっさと大検、高卒認定受けて大学に行ってしまおうか？　そうすれば後はここで習得した異端技術の知識を使って博士号なり取って、悪目立ちしない範囲で需要のある技術で特許でも取れれば将来安泰だろう。

懸念はこの隠(こ)し部屋(こ)にある異端技術が１００年くらいまでの古いものだということだろうか。いつかどこかで最先端の異端技術に触れる機会が在れば良いんだが、こればっかりはしょうがないか。

そんなことを考えながら、俺はもういい時間だと今後入り浸るだろう隠し部屋を後にする。

またわずかな時を挟んでカードデッキ、『完全聖遺物〝無銘〟』と共に新たな転機が訪れるのを予期できぬまま。

つづく？

# シンフォギア二次：転生オリ主・オリライダー龍騎編

そのさん

『　戦騎龍唱シンフォギアＯ　』

序章Ⅲ―ａ

覚醒の火　Ｉ

「だから死亡フラグの建つ都会暮らしには戻りたくなかったんだ！ノイズ的に考えてぇっ!!」

あれから無事小学校を卒業し、現在中学二年の１４歳になった俺、一文字　巧は自身のした選択を棚上げして叫びながら街中をノイズに追い掛け回されるという主人公（ビッキーも第一話で）も経験した命懸けの多対一鬼ごっこを繰り広げていた。

じっちゃんの武家屋敷の蔵で見つけた隠し部屋を見つけてから、ご先祖の遺した手記に記されていた通りに屋敷に隠されていた隠し部屋の鍵の在りかを見つけ出し、無事に鍵を確保した俺は自由にあの隠し部屋へ出入りできる術を手に入れた。

それからは錬金術や聖遺物からなる異端技術を貪欲に吸収していった。

まあ、隠し部屋に備わった機能か部屋にある本を始めとした物は皆すこぶる保存状態は良いものの、１００年ほど前の古い物だから現在の異端技術研究の最先端と比べたら基礎や基本レベル程度に考えていた方がいいだろうけれど。

そうして暇さえあれば隠し部屋に入り浸たった結果、小学校高学年となった頃には隠し部屋にある異端技術知識は学習しきって予習復習から『完全聖遺物（カード）〝無銘（デッキ）〟』の解析までやり出していた。

我がことながらＩＱ６００のチート学習能力パネェわ（遠い目）。

ん？　小学校の思い出？　先々のもしものことを考えて長く早く走るための体力作りで成長を阻害しない程度に色々身体を鍛えてはいたけれど、悪目立ちしないよう体育の授業や運動会なんかはバレないように手を抜いてやり過ごしていたし、強いて目立ったと言うことで上げるとしたら科目問わずテストで毎回満点取ってたくらいか？

なんというか、前世からの人嫌いもあって今生の俺って奴は基本かなでちゃんが絡まないと無口無愛想な上、他人とは一歩引いて事務的に接して周りへ能動的に関わることはしなかったから、これといった小学校の思い出は特にないな。

ボッチ？　確かに友達はいなかったが、友達欲しいけど友達作り（コミュ力不足）が下手で一人ぼっちの人間と周りがどうだろうと独りで居たいから煩わしい不要な友人を作らない人間とを一緒にしないでもらおうか。

大体小学校時代にちゃんと友達はいた。かなでちゃんとの幼馴染みの友人関係は遠距離ながら続いていたんだぞ。

電話とメールのやり取りが大半だったけれど、夏休みなんか「はじめてのおつかい」よろしく妹ちゃんと二人だけで遊びに来てくれてじっちゃんの武家屋敷（チ）に泊りがけで夏休みを一緒に過ごしたことだってあるんだ。

中学へ上がって最初のＧＷ後に天羽家の訃報が届いてからはかなでちゃんとは音信不通になったけれども……

そしてツヴァイウィング（かなでちゃんのアイドル）のデビュー初日でマッハでデッドヒートしてチェイサーにファン１号になりましたが何か？

## 閑話休題（それは兎も角として）

俺は小学校卒業後の進路としてじっちゃんから都会にある中等部から寮住まい可という初等部から大学部までの一貫教育が受けられる私立の名門共学校への進学を勧められた。俺の頭の良さから将来を慮ったじっちゃんの親心からくる提案だったのだろう。

田舎ではダメだというわけじゃないが、最新の優れた知識を学ぶなら発信地かそれに近い都会へ出た方が良いということなんだろうけれど、俺としては都会暮らしは死亡フラグが建ちやすそうで少々抵抗があった。

第一期ラスボス（終わりの女）の暗躍的に考えてそろそろ特異災害頻発期とでも言うようにノイズがほぼ連日湧く時期だ。というか小学校高学年当時すでにＴＶでは特異災害のニュースが増えていたし、政府（恐らくは特異災害対策機動部の表を担う一課）主導での避難先や避難時の注意事項などがニュースや情報番組の特集で何度も流されていたし、前世（原作）の知識（では）から現場へ装者をヘリで運んでいたからリディアン音楽院付近じゃなければ大丈夫だろ、などと安易なことは到底思えなかった。

しかし俺はしばし悩んだ末にじっちゃんの勧める進学を受け入れた。

死亡フラグがと色々危惧していたのになぜか？

答えは二つ。

一つはカードデッキ、『完全聖遺物〝無銘〟』の解析がおおよそ終わっていたことと無事？　適合を果たし、ノイズ出現を数分から数十分前に感知できるようになっていたから（あの龍騎でお馴染みの自分にだけ聞こえる『キィィィィィィンキィィィィィィィィィン』という甲高い耳鳴りみたいな音を警告音として発し、音の大きさで彼我距離を知らせてくれるようだ）。

もう一つは、天羽（幼馴染み）奏への気がかり……

彼女（かなでちゃん）へ降りかかる悲劇をどうにかしようなんて己惚れた何様視点なことは考えてはいない。そういうものだからと理解したくはないが、必要な悲劇と納得してはいたから。

大体、かなでちゃんに発掘現場には行くなと警告しようと何故どう

してと問われれば返答に窮するし、説明のしようがない。出来たとしてかなでちゃんと妹ちゃんとおばさんは兎も角、発掘現場で働いているだろうおじさんをどうやって発掘現場から遠ざけるというのか。

〝無銘〟の力を使って助ける？　適合できただけで俺を認ていないのか、どんなに調べてもカードすら一枚も引き出せず、〝無銘〟は高性能ノイズ警報器以外の力を示さない。相変わらず俺はノイズに対して無力なままだ。

だから、仕方がない。

せめておじさんとおばさん、そして妹の□□□ちゃん。家族を失ったかなでちゃんの心の支えとかにでもほんのわずかで良いからなればなどと烏滸がましいことを考えて、ことがあればなんとか駆け付けられるだろう都会の学校へ進学を決めた。

まあ、フタを開けたら特異災害のニュースとじいちゃん経由で届いた天羽家の訃報からかなでちゃんとは音信不通、連絡取れないままで無事な姿を確認できたのはアイドルデビューした時だったけどねぇ。

ほんのわずかどころか、1ミクロンの支えもできずに進学を決めた決意じみたものが無意味に終わったよ……

……

……

……

笑え……笑えよ……（やさぐるま並感）

いや、分かってはいるんだ。機密情報の漏洩防止とか諸々の理由があるんだろうってことは、あるいは単純にかなでちゃんの今まで使ってたケータイが損失して連絡着かないとかいうオチなんだろうなってことは。

かなでちゃんの方から連絡が来ないのも置かれた状況と心境的に掛けずらいんだろうかと勝手ながらそう推察している。

というか天羽家の訃報を聞いてから俺の記憶が一週間ばかり飛んでる。気が付いたら一週間以上経ってたって言うな。

ちなみに周りからはその間の俺は人形めいた光のない目と顔色の

悪い無表情で、問いかけたら機械的に応対してきて非常に怖かったとかなんとか。怖がられて距離を置かれたところで学校に友人なんていないし、必要ともしていないからどうでもいいけれど。

ともあれ、知識として知っていて覚悟はできていたはずなんだが、随分と強く衝撃を受けたようだ。

……薄情者のくせに、な。

そんな自嘲を顔に張り付けながら過ごす中学時代は中学二年のとある日曜日。俺は大型書店へ予約していたツヴァイウィングの特集記事が載ったアイドル情報誌数誌を受取りに街へと出ていた。

しかし何ごともなく書店へ辿り着くことは叶わず、その道すがらで唐突に〝無銘（キイイイ）〟の高性能ノイズ（イインキイイインと）警報の耳鳴りが今までにない大きな音で聞こえて思わず狼狽えてしまい、続き遅れて特異災害警報が鳴り響いてさらに狼狽えてしまった。

何のための〝無銘〟の高性能ノイズ警報機能か。聞き慣れていた遠方での出現を知らせる極小さな音と違う特大の警告音に狼狽えて、すべき行動の期を逃すなぞありえない。一年間の寮暮らしで周辺地域、自身の活動範囲内に一度も特異災害が起きてなかったとはいえ平和ボケも甚だしい。

そう自分を罵りながら、警報に慄き逃げ惑い出した周りの人々に嫌な既視感と不快感を感じつつ、俺は〝無銘〟の警告音へ意識を割きながら走り出した。

少しでも音が小さくなる方向を探し求めて。

もっとも、それを見つけられぬ内に「ここはもう特異災害（ノイズの群れ）の中心地、もはや意味はない」とでも告げるように〝無銘〟の警告音は消え、普通に逃げ惑い逃げ遅れただけとなってとうとうノイズに出くわし、冒頭の有り様となったわけだが。

「ちぃっ!?　こっちもか！

雑魚で物理攻撃無効だけでもアレなのに、遮蔽物完全無視とか！

ズ（チート）ルにもほどがある!!」

逃げた先、正面に目に痛い極彩色（ノイズの姿）を認めてすぐに右へ伸びる道へ逸

れ、進んだところにあった丁字路で待ち伏せよろしく壁や建物を透過して湧いてくるノイズに回れ右とばかりに背を向けて今更な悪態を吐く。

このまま道なりに逃げ惑っていてもいずれ積むのは容易に想像できる。かと言って下手に壁を乗り越え家屋の屋根へ上って、なんてのは逃げ道を自ら狭める下の下の愚策。

さりとて第一期第一話よろしく川に飛び込むのも逃げ道を塞がれて追い詰められた状況でもない限りは同じく愚策だ。着衣のままで泳ぐのは普通に走り続けるよりも体力を消耗し、川から上がれば水分を吸った着衣が重しとなり体温を奪ってさらなる消耗を強いてくる。余程の強運がなければ、運よく川の流れる先がノイズの感知圏外と発生地域の外へ抜け出られる物でなければ普通は積む。

俺にできることはシンフォギア装者のかなでちゃんたち二人がノイズ殲滅に駆け付けるまで何としても逃げ延び、生き長らえることだけだ。ノイズと戦うことはおろか抵抗することさえ許されない無力の俺に、他にできることなどありはしない。そんな余裕もない。

「あうっ!?」

「ッ!? ママ!」

不意に聞こえた他者の声。ノイズから逃て走り続けながら、現実逃避に在るかもわからないノイズからの完全逃亡に巡らせていた思考が止まる。

声の聞こえた方へ自然に目が向いて捉えたのは6歳ほどの女の子を抱えたまま倒れている女性 ――

女性は女の子を抱えたまますぐに立ち上がろうとするも、足を挫いたのか痛みを訴える呻き声が出るだけで立ち上がれない ――

そのそばへと極彩色の■影たちが近づいて来ている ――

それに気付いた女性は抱えていた女の子を逃がそうと突き飛ばす

ように手元から手放し　――

極彩色の■影たちは槍のように身を伸ばし、女性と女の子へ飛び掛かり　――

「や、め」

色を失った世界　――

女性と女の子から視線が外せぬままの視界に知らず伸ばされた――

自分の右手が入り込む　――

全てがゆっくりと動く中、極彩色の■影たちが女性と女の子に　――

「あ」

触れた　――

「あ……」

数秒前まで生きた女性と女の子だった、母娘だったモノ　――

人の形をした炭が崩れて灰になる　――

その光景は見たはずのない両親の最期を想起させて消えていく――

伸ばされたままの自分の手が弱々しく虚しく空を掴み　――

世界に、色が戻る　――

「ッ……」

目の前で起きた初めて目にした光景が頭の中を埋め尽くす。

弱々しく空を掴んだままの手が震えていた。

こんなところで足を止めている場合じゃない。ああなりたいのか？　違うだろ。だから動け！　足を動かせ！　早く逃げろ！

そう冷静な自分が自分へすべき行動を示すのに身体を支配する感情的な自分が胸中で渦巻き襲う苦痛に叫びを上げ続けてその場を動けない。

この痛みはなんだ？　この苦しみはなんだ？　なんだ!?　何なんだ!?

薄情者が、何をいまさら。他人の最期を目のあたりにした程度で喚くな。

感情的な自分の疑問（言葉）を冷静な自分が自嘲と共に否定するが、それでも感情的な自分は変わらず叫び続ける。

自分の思考が次第にグチャグチャになっていく中――

――　手が届くのに、手を伸ばさなかったら死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ　――

そんな言葉が頭に浮かんで消えた。

この言葉はどこで聞いた、誰の言葉だったか……

そんな些細な疑問に思考が一瞬止まり、一本に纏まり出して記憶を探り始める。

あぁ、これは前世の……

だから、俺は……

心を苛む痛みが何かを理解した。記憶の中のヒーロー（人物）とは抱いた感情も想いも違うけれど、受けた痛みは似たもので。

もしもを起こせた力が手元に在るために、無力だから仕方がないでは目を背けられない（終わらせられない）。どうしようもなく燻り続ける想いが心に宿り

出す。
震え続ける空を掴んだ手に次第に力が込められて、握り拳へ変わっていく。
「ッッッ!!」
手が届くのに、手を伸ばせなかった。この日この時、死にたくなるほどの後悔を……
俺は抱え込んだ。

「クッソッッッたれがぁあああーーーッ！！！」

近づいて来るノイズどもなど知らぬとばかりに天を仰いで喉が引き裂けそうなほどの声で叫びを上げる。
ふつふつと止めどなく湧き上がってくる。変わらず続くはずだった日常を非日常へ塗り潰し、恐怖と絶望を振り撒くノイズ（モノ）への ――
「絶対にッッ……」
賢（さか）しく理由を付けては逃げて目を逸らし、力を持ち得ながらそれを使えずに何もできない自分自身と不条理と理不尽を押し付けて来るモノ全てへの ――
「ゆ゛る゛さ゛ん゛ッ!!」
怒りと憎しみが!!

ＧｙｕａＡｏｏｏｏｏＯＯＯＯＯＯＯＯＯｕｎｎ!!!

瞬間、懐に入れていた〝無銘〟が服をすり抜（透過）けて飛び出せば、耳を劈く怪獣の咆哮のような鳴き声が響いて、すぐそこまで迫っていた周囲のノイズが弾き飛ばされ光の粒子となって消えた。
「起動、した」

その言葉が聞きたかったというように悠然と宙に浮き、淡く輝く完全聖遺物（カード）〝無銘（デッキ）〟。

「そういう、ことか」

足りなかったのだ。〝無銘〟を起動させるための必須条件が。俺はそれを満たしていなかった。賢しい頭で諦める理由を並べて目を逸らして来た、逃げて来た今までの俺では満たし得なかった条件。

「ノイズへの敵意……

いや、誰かを守ろうと、助けようと降り掛かるノイズ（死）へと立ち向かう戦意、か」

解析して答えはわかっていたはずなのに俺は何もわかっていなかった。わかった気になっていただけだった。

自分の馬鹿さ加減に嫌気がさしながら宙に浮く〝無銘〟へと俺は左手を伸ばした。

つづく？

# シンフォギア二次：転生オリ主・オリライダー龍騎編
## そのよん

『　戦騎龍唱シンフォギアO　』

序章Ⅲ―b

覚醒の火　Ⅱ

完全聖遺物〝無銘〟

もともと〝無銘〟はノイズという脅威へと抗うために作られた兵器(物)だった。

ノイズとはバラルの呪詛によって統一言語による相互理解を失った先史文明期の人類が互いに手を取り合い協力し合うことを否定拒絶。互いの殲滅を選んだ末に自然環境を汚染することなく人類のみを殲滅するために作り出した人間(兵)だけを殺す存在(器)。

〝無銘〟はそんなノイズを差し向けられ、劣勢に立たされた側の人類の一つが作り出した対ノイズ兵装(カウンターウェポン)。

ノイズが人間界の物理法則下にない別位相に身を置くことで物理干渉(攻撃)を無効化しているのなら、同じ位相へと潜り、その物理法則下で戦えば攻撃が中てられるはず、という些かどころではない無茶な発想から生み出されたが、それでも一定以上の効果を生み、完成に至った。

しかし対ノイズへの無茶なアプローチからもわかる通り、最初期ロットの物は追い詰められた時間的余裕もない状況の中、物量で攻めてくるノイズへと対抗するために量には量をと質を度外視して量産性を重要視し過ぎたために適性さえあれば適合率が低かろうと起動

する後の世でも聖遺物とはとても呼べない質の低い代物で（言ってしまえば龍騎で言うところのエンブレムなしの「ブランク体」程度の戦闘力しかなく）、結局は無尽蔵の如く湧くノイズの前に同胞たちを逃がす時間稼ぎの肉壁にしかなれず、最初の担い手たちは死を恐れながらも同胞を守るために戦い、力尽き〝無銘〟諸共に散っていった。

逃げ延びた者たちがノイズから生き延びるためにまた新たな〝無銘〟を作り、改良改造しては抗い逃げ延びてを繰り返し、最終ロット最後発（今目の前にある〝無銘〟）でやっと低位ながら聖遺物と後世で呼ばれるだけの力を持つに至った。

しかし、聖遺物となったことで起動には高い適合率が必須となり担い手は見つからぬまま、そして後に神話伝説歴史に名を残す単騎でノイズの群れを薙ぎ払える高位の聖遺物が世に現れ出したことで〝無銘〟は表舞台に立つことも、誰の記憶にも名や姿を留めることもなく歴史の闇へと消えていった。

そんな来歴的なことが〝無銘〟内部の記憶回路（モノリス）の一部に記されており、こんな一文が最期に添えられていた。

――　聖なる泉　猛き焔宿りて　悪魔を討つ竜が目覚めん　――

解析して内部のモノリスを見つけて読み解き終わった当時「クウガかよ！」とツッコミを入れて然して重要視しなかったツケが今なのだから、失笑すら出やしない。

自分の馬鹿さ加減に嫌気がさしながらこっちに背を向けて宙に浮くカードデッキ、〝無銘〟へと左手を伸ばし、掴み取る。

瞬間、左手から左腕を伝って〝無銘〟の宿す力（淡い光り）が流れ込んでくると共に虚像として宙に現れた独特の形状をした『銀のベルト』が合体とでも言うような勢いで左右を反転するように向きを変えて腰へ装着され、実体化した。

「……纏（てん）」

しばしの逡巡の後に〝無銘〟、カードデッキをベルトのバックル横

に来るように左手を引きながら右手を差し出すように指を大きく広げて前へ突き出し、掴み取って引き上げるように手首を回しながら拳を握りこむ。

手が届くならもう途惑わない、必ず手を伸ばす。

そんな決意を込めた変身ポーズを取りながら、しかし口にするのは『変身』の言葉ではない。

〝正義の味方〟

空想の中の、虚構の英雄。しかし男の子なら幼き日に見たその姿に誰もが憧れ、そうなりたいと夢見た決(スー)して悪(パー)に負(ヒー)けない英雄(ロー)。

『仮面ライダー』

例え虚構の存在であっても、だからこそ存在できる理想。憧れの具現。そんな英雄(ヒーロー)のおとぎ話のひとつであり、物語の主人公たちの戦士としての名。

その名を俺が騙るのは無論のこと、その代名詞たる掛け声を口にすることさえも許されない。その資格は何一つ、俺にはない。

虚構と現実は違うと言われればそれまでだが、俺には彼らのような清廉さも理想も信念も、ましてや善性も正義感もありはしない。

当然だ。あるのはただ『嫌だから』なのだから。

「身」

右手を腰元へ引き、叩き込むようにカードデッキをバックルへ差し込む。

正面と左右から鏡写しの虚像が現れ、それぞれクルクルと左右を反転しながら自身の身体へと重なり、姿が仮面ライダー(虚像の物)へと変わる。

痛いのも苦しいのも怖いのも、他人のために身体張って命を懸けるなんてことも真っ平だ。それは変わらない。ただ、そんな思いよりも痛くて苦しい、辛いことを知ってしまったから。そんな物を抱え込むのはもう『嫌だから』手を伸ばす。

『嫌だから』自分のために身体を張って命を懸ける。『嫌だから』自分のために誰かを助けて、『嫌だから』自分のために誰かを守って戦う。

押しつけがましい独り善がりの偽善者なぞに、彼の英雄(ヒーロー)たちの名を

騙ることなど許されるものか。
「これが俺の力、か……」
黒のアンダースーツに所々山吹色で縁取られた白い装甲というどこかクウガ・グローイングフォームを思わせる形の籠手に包まれた両手に視線を落とせば網膜投射によって視界内の隅に小さな六角形が組み合わさってできたウィンドウが開き、自身のバイタルデータなどと今の姿が３Ｄモデルで表示された。
その姿は端的に言えば「コウモリからドラゴンにモチーフを変えてデザインし直した仮面ライダーナイト」。もう少し詳しく言えば西洋竜（ドラゴン）の顔を模したバイザーに、額に角を思わせる突起が一つ。肩アーマーは騎士鎧のように丸くてゾルダよろしく側面と上部に武装を装着するジョイントがあり、召喚機は龍騎のような左籠手型で額に角の生えた西洋竜（ドラゴン）の顔を模していた。
「日本語？　古代言語じゃないのか？」
六角形のウィンドウの３Ｄモデルからこの姿の名称に今現在の自身のバイタルデータなどの情報表示に目を向ければそこには英語表記もあるものの、とても見慣れた日本語が。
訝しむもすぐに疑問の答えは出た。
〝無銘〟の解析をした時に判明した機能の一つ、『学習機能』によるものだと。これは〝無銘〟を担い手へ合わせてパーソナライズしていくことで力をより引き出しやすくするための機能であり、この表示言語はその機能の一部として担い手の持つ知識を取り入れてシステムの最適化を図った結果、と言ったところか。
「ッ!?　思索に耽っている場合じゃなかったな」
気付けば周囲を埋め尽くす勢いでぞろぞろとノイズが集まり出していた。
これも〝無銘〟に備わる機能の一つ、『誘因機能』によるものだろう。ノイズは人間のみを襲う。ならば一人の人間を数百人数千人が一か所にいるようにその感知機能を誤認させられればその反応を最優先の標的へ定めさせられる。
それはノイズの種類によって感知機能に違いがあるため絶対では

ないにせよ、数十人程度の人々の集まりならばノイズを攻撃せずして引きはがせられる。
最初期ロットの〝無銘〟が肉壁になる程度の力しかなかったにも拘らず、多くの同胞を逃げ延びさせられたのはこの機能のおかげであり、同時に量産された多くの〝無銘〟と担い手たちが一人残らず全滅した最大の理由でもある。
「まあ、これだけ集まればそうもなるよなチクショーが！」
数えきれないほど集まったノイズがどろりと溶けて寄り集まり、巨体の異形へと姿を変える。いわゆる大型ノイズのお出ましだ。
「チィッ！」
大型ノイズの上げた耳障りな鳴き声に顔を顰め、舌打ちしながらその身の一部を飛礫とした攻撃を躱し、あるいは防護機能で守られた拳や手刀に掌底で触れてなんとか捌いていくが、飛礫は人の身の丈に迫る大きさと重量に加えて自身は身体を鍛えてはいても武術は誰かに師事したわけでもない我流の上に初めての実戦。
「ぐがッ!?」
回避や受け流しが繰り出される猛攻の前に長く続くわけもなく、直撃を喰らって弾き飛ばされてしまう。そしてその先には数台の停車された車。
このまま行けばろくに受け身も取れずに激突するが、激突したところで致命的なダメージにはなり得ない。ただ追撃を許す隙はできてしまう。
そう刹那の状況判断で取った俺の行動選択はひとつ。
『位相差障壁』の使用。
正確には『位相間移動』であり、ノイズほど世界に存在する比率を自由自在に制御し、物理的干渉（攻）を可能な状態にして相手（撃）に接触と物理干渉（被攻撃）の無効化ができるわけではない。
あくまでもノイズが身を置く人間の世界とは異なる世界、別位相へと潜り込むだけだ。ゆえに人間世界への物理的干渉は不可能な状態になり、攻撃を加えられることのできるのは同位相にいるノイズに対してのみとなる。

しかも潜っていられるのは１０分弱、およそ９分５５秒ほどの限られた時間のみ。
制限時間を過ぎてもノイズの位相に留まれば〝無銘〟の防護機能は崩壊を始め、二度と居るべき元の位相へは戻れず、宇宙空間のような通常生物（人間）にとって劣悪な環境に生身でさらされることになる。
仮に万が一に生存がかなってもそこは二度と元の位相へは戻れない異次元の狭間。まさに『ベントされた』、だ。
まあ、制限時間内に一度でも元の位相へ戻って一分前後のインターバルを挟めば別位相に潜ることで酷使された防護機能が回復し、制限時間はリセットされるようだが。
しかしだからと言って『位相間移動』はそうひょいひょいできる物でもない。潜る時も戻る時もタメのような数舜無防備になる隙が生じる。大型ノイズ一匹相手ならまだいいが、無数のノイズに囲まれた状況では袋叩きにされかねない大きな隙だ。
今の状態ならその心配はないと思いつつ、ちゃんと無事に戻れるのか一株の不安を抱きながら『位相間移動』を意識すればスゥっと身体の色が配色はそのままにノイズと同じ極彩色な色合いへ変化し、背中ら激突するはずだった車を言葉にしがたい何とも奇妙な感覚にさらされながらすり抜け（透過）、宙返（トンボ）りを切って態勢を整え右手を突きつつ地面へ足から着地する。

ジャキン！　カッシュンッ

さあ、どう反撃しようかと立ち上がった時、左腕は左籠手型召喚機のギミックが一人でに動く。ドラゴンの顔を模した籠手、その額に生えた角が肘側へ押し込まれて「ジャキン！」と音を響かせれば籠手の肘、召喚機の後部が勢いよく迫り出してカードをセットするカードトレイが姿を現した。
「初回限定サービス、ってか」
龍騎原作第一話のワンシーンが思い浮かび、思わずマスクの下で苦笑い、バックルのカードデッキへ右手を伸ばす。一枚のカードを引き

出して目的の物か確認し、カードトレイへとセットして召喚機へと押し込む。

『ＡＤＶＥＮＴ』

ＧｙｕａＡａｏＯＯＯＯＯＵＮ!!

そんな合成音と共に〝無銘〟が起動した時も聞こえた耳を劈く怪獣の咆哮のような鳴き声が響き、虚空から機械のような身体をした一頭の西洋竜が現れる。

山吹色で縁取られた白い姿の竜。

付け根にロケットブースターが付いた金属版が重なってできたような白い竜翼、鋭い爪はない代わりに指先から何かを撃ち出せそうな四本指の手、分厚い装甲のごとき胸部としなやかな胴体、太く力強い上腿を持つ逆関節の足、細長くも鋭い尻尾、そして額にも生えた鋭く大きな角。

このドラゴンこそが龍騎でいう契約モンスターに当たる〝無銘〟内部の記憶回路の記述にあった自律型完全聖遺物は『契約機獣』、名を『カイゼルドラグーン』という。

ノイズと同じ位相にいるために極彩色な色合いで少々目が痛い。白と山吹色の二色だけな分やたらカラフルなノイズよりは遥かにマシだが。

Ｇｙｕａｏ ＯＯＯｕ!!

現れ飛翔する勢いのままに大型ノイズへと攻撃を仕掛けるカイゼルドラグーン。

口から火球ならぬ電撃弾を撃ち出し牽制、着弾爆発衝撃で直撃はしないが怯んだ大型ノイズを体当たりで盛大に弾き飛ばす。

「やはり、大型一匹じゃ済ませちゃくれないか。

カイゼルドラグーン！　そのデカブツはしばらく任せる！」

ＧｙｕｏａＡＡｎ!!

お代わりだとでも言うようにわらわらわらと湧くようにまたノイズが集まり出していた。『誘因機能』によるものだとわかっていても見ていて気分のいい光景じゃない。思わず吐きそうになったため息を飲み込んで呼び出したばかりのカイゼルドラグーンへ指示を飛ばし、返された咆哮を背に再びバックルへ手を伸ばす。

「俺の方は雑魚狩りだ！」

デッキ内のカードに何があるのか？　そう思考するだけで視界の隅に新しいウィンドウが開き、カードの種類が表示されていく。その種類の多さに一瞬驚くがここは戦場、これ以上の無駄な思考は命取りとすぐに気持ちを切り替える。

望むカードをイメージしてカードを引き抜き、その手で召喚機のドラゴンの額に生えた角を肘側へ押し倒すように押し込み、カードトレイを出させてカードを差し込み、トレイを元の位置へ押し込む。

そんな一連の動作を流れるようにこなせば――

『ＧＵＡＲＤＶＥＮＴ』

虚空から飛んできたカイゼルドラグーンの胸部を模した盾、『カイゼルシールド』を受け取る様に左手に装備し、続けざまにもう一連の動作。

『ＳＷＯＲＤＶＥＮＴ』

次に飛んできたのはカイゼルドラグーンの尾を模した馬上鎗、『カイゼルランサー』を左手に装備し構える。

「さあ、Ｓｈｏｗ　Ｔｉｍｅだ！」

そう声を上げ、俺は盾を突き出してノイズの群れへ突貫した。

『ＦＲＥＥＺＥＶＥＮＴ』

龍騎原作ではミラーモンスター一体を凍らせ、行動不能にする効果のカードはしかし、効果が広範囲に及ぶようになっていて周囲に群がるノイズを一瞬で凍り付かせ行動不能を強いて見せた。

「カードの持つ効果の変化、『存在Ｘ』の仕業か……」

設定上とはいえ補助系カード全部所持のオーディンと同じだけでもチートなのに、さらに一部は数枚積みで物によっては効果が魔改造されてるってどうなんだよ」

群がるノイズ相手に大立ち回りを演じるが、戦える制限時間よりも自分に時間的余裕がないことに気づいて一気にかたずけて離脱を図るため、効果が変化しているらしかった『ＦＲＥＥＺＥ　ＶＥＮＴ』を使ったのだが、ノイズに限定してとはいえども広範囲内の対象纏めて行動不能はさすがにチートだろと引いた。自分の使える力じゃなかったらさらにドン引きしてただろう。

ともあれと意識を切り替え、俺は盾と鎗を手放して消し去ると、制空権を制して大型ノイズを相手取っているカイゼルドラグーンの方へと目を向けて、一枚のカードを引き抜く。

「カイゼルドラグーン！　決めに行くぞ！」

そう叫んで声を掛ければカイゼルドラグーンは「ＧｙｕａＡｏＯ！」と吼えて応えると、大型ノイズへ身体をしならせて振り下ろの力強い尻尾の一撃を放つが躱されて地面を砕くだけに終わる。

元より牽制の一撃で放ったゆえか、然して気にも留めずにカイゼルドラグーンは大型ノイズへ背を向けて俺の方へ向かって飛翔し、俺の意を汲んだのか電撃弾を連射して『ＦＲＥＥＺＥ　ＶＥＮＴ』で動け

ないノイズの群れを一気に消し飛ばしていく。
俺の背後の向こうへと頭上を通り過ぎるまでそんな爆撃飛翔であっという間にノイズが――　異なる位相の物理法則下ゆえか炭素化せず　――光の粒子となって吹き飛ぶ塵のように消えていく。
「これでＦｉｎａｌｅだ」
耳障りな鳴き声を上げる大型ノイズへ相対し、手にしたカードを召喚機へ。
『ＦＩＮＡＬＶＥＮＴ』
足を肩幅ほどに広げて腰を落とし、時間的余裕の無さから出てくる焦りを鎮めるように深い呼気を行いゆっくり両手を広げ、動きを止めることなく流れるように右手を腰元へ、左手を前へと翳す。それら上半身の動きに合わせて蹴り足となる右足を後ろへ下げる。

Ｇｙｕａａａ　ＡＡＡＡＡｏＯＯＯＯＯＯＯ!!

そんな構えを取っていく俺を中心に一度大きく旋回してカイゼルドラグーンが上空へ急上昇する。
今から放つは名付けるならば『ドラゴンサンダーキック』と言ったところだろうか。まあ、思いっっっきり龍騎の『ドラゴンライダーキック』の電撃版だが、俺のせいじゃない。全ては奴の仕業、おのれ『存在Ｘ』ううう!!
などと戯言を内心で独り言ちて燻る焦りを誤魔化して真上へ跳び上がり、頂点でトンボを切りながら跳び蹴り姿勢を取った瞬間、俺の背後へと来ていたカイゼルドラグーンの口から電撃弾が放たれてイナヅマ纏う必殺キック弾となって大型ノイズへ撃ち出される。
大型ノイズは相も変わらぬ耳障りな鳴き声を上げると撃ち落としてやるとばかりに飛礫を飛ばしてきたが、撃ち出された勢いと纏ったイナヅマの前には全くの無意味と示すが如く弾いて砕いて直進直撃。大型ノイズが爆散し、光の粒子が弾けて散っていくのを背にして軽く

スライディング気味にズザリと音を立てて着地する。
「……」
時間的余裕がないとは言えヘマをするわけにはいかぬとしばしの残心。しかしてノイズは湧いてこない。
ひとまず、ではあるが『誘因機能』に引っかかる範囲内のノイズは一掃できたようだ。
「さて、後はさっさと」

――Croitzal（クロオーイツァル） ronzell（ロンゼェル）
Gungnir（ガングニール） zizzl（ツィーール）――
――Imyuteus（エミュテウス） amenohabakiri（アメノハバキリ） tron（トローン）――

「!?」
聞こえてきた詠（うた）に驚き振り返って顔を上げれば、時間的余裕がないと燻っていた焦りの原因が空から降ってきていた。

つづく？